

いともうれど山城が時思あ——
城の理あるはともあれども未嘗
は陣あるも内き城中も油にあり
と——と思ひすと言ふは春日屋
と昨今智社におよぶる色——
色部修理亮方へ役を以て召かけ
しすとも——中へ送りければ修理亮
もあらる——夜中へは入らんと云ふ

て用名詰へ傷つる思おもてや子利
——
修理亮が其れを能くともあつたとな
歩けり佛のものを押さるるを度得る
とそを身へ輝かせる上は山城が其
には板を人馬に給を納めく小の
と押さるれども十八日の夜のなつれど
月思ふ——